

幸子の映画

食べある記



★ゲートルは何を食べたか★

そう多くないながらも世界の国々にお邪魔をさせて戴いて一番心に響いたのがドイツであったような気がします。どの国の観光もそこその趣がありながら心の中では通過点でしかありませんが、素晴らしい人との出会いは長く心にとどまり、人生観さえ左右するほどの感動を覚えることとなります。二年前訪れたドイツはまさしく自分に大きな影響を与え、人生の教訓を与えてくれて今もそのときの感動を新鮮に思い出すことが出来ます。今しなくてはならないこと、これからすべきことの道しるべにもなってくれているように、単なる観光旅行でなかったドイツの旅をご紹介します。

まだ雪が残る札幌を発ちヨーロッパ

パのハブ空港と言うべきフランクフルトに到着、翌日朝早く町を散歩していると満開の八重桜が見事に咲いて歓迎してくれますし、さくらんぼの白い花も今が盛り。通勤時間にもかかわらず中心からそうはずれていないホテルの周りは自動車の騒音もなく静かに動き出し、同じ自動車産業が盛んな日本の朝とは大きく隔たりを感じてしまいます。環境を最優先に考えているドイツは中心地から自動車を排除、公共の電車が短い間隔で走っています。二十年ほど前、工業化が盛んになって自然が破壊されるのを見てから環境問題に取り組み、今は進みすぎて少し緩和したとも聞きます。高速道路、大学までの学費は要らず、福祉に文化や国の維

持にと大まかに四分して使われる税金。収入の二五パーセントは税金だと言いますがはつきりした使われ方をすれば国民は納得して納めることが出来るでしょう。観光にも配慮して町の景観は住民が維持管理し、隣の窓の汚れまでチェックされると聞きます。それくらいな配慮があつてはじめてきれいな町だとの感動に結びつくのかも知れません。

誰もが一度は読んだ「若きゲートルの悩み」を書いた詩人ゲートル。我どさん子ワイドグルメツアーはゲートルの足跡をたどる「ゲートル街道を行く」でした。

ゲートルは詩人であるばかりではなくエッセイ、評論、オペラの台本、紀行文、ドラマなどを書かれその上



クッキングキャスター

星澤 幸子

text : Hoshizawa Satiko





自然科学者、弁護士、行政官、政治家、画家とおそるべき多大な才能を活かして精力的な人生を歩んだ人であることが分かってきます。

フランクフルトの裕福な家に生まれ、一生お金に不自由することはなかった中で才能や地位におごることなくまじめに人生を生き抜き、今なお多くの人を感動させ現代に通じる思想を残してくれたゲーテ。五十年を生きたワイマルのゲーテハウスには「もつと光を」の言葉を残して八十二歳で旅立ったゲーテのベットがあります。がたいへん質素なことに驚きます。立つて半畳寝て一畳の日本の精神文化を思い出しました。各国

から集められた食器や調度品、莫大な蔵書や標本とは別に、生活そのものはベットに象徴される質素なものであったようです。多くの書物をのせた机は「小さな立ち机」でした。人は立っているとき一番脳が活発になるそう。自然学者でもあるゲーテは本質に沿うことで豊かな文章や論文を仕上げて行ったのでしよう。

こんなに体力がある人ならば女性への興味も気になるところですが、生涯「美しい魂との出会い」を求めその節目節目に全身全霊を傾けて女性に恋をし、あふれ出る感情を伸びやかに自由に表現し多くの不滅の詩や小説、戯曲を残しました。ではそんな精力的なゲーテはいったいどんな物を食べていたかに一番興味を惹かれました。ゲーテハウスの隣によく通ったといわれる「白鳥亭」というレストランがあります。九三年には天皇陛下も行ったとか、そこでの料理は野菜たっぷりのスープや川魚料理、鹿肉の煮込みなど見事な味ばかり。四五〇年続いている落ち着いた雰囲気、マホガニー色の木の壁は重厚で歴史を感じます。レストランのメニューは別として、ドイツの一般的な家庭料理は豚肉の塩茹で「アイスバイン」、その何倍もの「マッ

シユポテト」や塩漬けキヤベツの煮物「ザワークラウト」などがあります。が決して贅沢な食事でなかったから八十二歳まで情熱的に生きられたものと察すること。が出来ますし、ゲーテの絵を見る限りではスリムな体型を維持されていたように見受けられます。違いはあ

っても同じレストランで同じ椅子に腰掛け同じような料理を口に出来たことはゲーテにより近くなつた感があつて嬉しくなります。少な目の食事が頭の回転を良くすることもゲーテは分かっていたでしょう。自分自身日々の食生活をもう一度見直して粗食に徹し、死ぬまで情熱を失うことなく意識をはっきりさせたまま人生を終了させたいものと願わずにいられます。

次回は各地で頂いたドイツの料理や文化について触れてみます。

第二次世界大戦に東西に分断されたベルリンは四十年の時を経て壁が取り除かれ、更に十年を経過して統一会議が開かれた一九九九年四月二十日私たちはベルリンにいました。



幸子の

映画食べある記